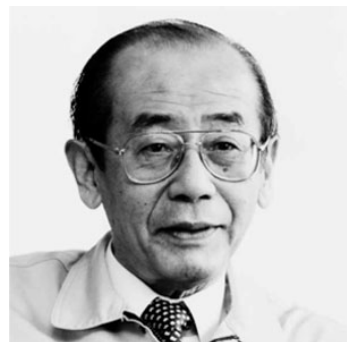


街や地域を形成する上で重要なのは、建物のデザインや機能だけではない。東京・浅草寺の仲見世通りに並ぶ商店のシャッターに描かれた「浅草絵巻」は、人通りの少ない夜でも通りの明るさを演出する。「人の心が土台にある」という文化シャッターの亀谷晋社長は、心地よく安心して使える商品を通じて街や地域に息づく豊かな営みに貢献する。



文化シャッター社長
亀谷 晋氏

住みやすさを生活者の視点で

人の心が地域づくりの土台

——建物や街の安全・安心について

第1に、家庭内のさまざまな危険についての配慮が必要だ。赤ちゃんからお年寄りまでが安全に暮らすというのはどういうことなのかを常に考えている。生活レベルでの心地よさ、つまり生活感覚に合った商品づくりだ。

具体的にシャッターについて言えば、開店時にゴコゴコと大きな音をたてたり、開き終わるまでに何分もかかるような商品では生活感覚に合っているとは言えない。開閉が早すぎても危険だが、安全には最大限に気を遣いながら、生活感覚に合った商品づくりを進めている。

その一方で、外からの危険については、侵入抵抗時間10分の商品開発を進めており、安全性は十分に高められる。外的な要因からの安全性を考える場合、ただカギをたくさんつけるだけでは、開けにくくなったりして不便なことも出てくる。ここでも生活感覚を意識している。

——住みやすく快適な地域づくりに必要なものとは

根本は社会性を持った人の心だと思う。昭和前半までは、おもてなしの心を持った人が多くいた。そのような心をどうつくっていくか。人間愛と言えばオーバーだが、その土台ができてこそ、住みやすい地域ができるのではないか。

——その土台がなくなっていますか

暮らしのフィールドには、まず家庭生活が

あり、それは学校や公民館、お寺などを含めた地域社会の中に含まれる。このほかに会社など職業社会のフィールドがある。現代ではすべての生活のフィールドが職業社会の理論、価値観に侵食されてしまっているようだ。その人の会社での評価が、家庭や地域にまで影響を及ぼしている。それはおかしいことで、本来は関係ないものだ。土木や建築などの構造物を考える前に、まず、心という土台から考えなければならない。

——企業として、それらを改善する試みは

社内では、ただ漫然と仕事をするだけではなく、機能や効率だけの商品開発でいいのか、人が人らしく生きるとはどういうことか、お互いに自覚を持とうと言っている。昨年7月、新社屋に移転したが、人が集まる場だからこそ、憩う・学ぶ・くつろぐといったことが一緒にできるような設計コンセプトを心がけた。壁で区切られたスペースの中で仕事をするのではなく、オープンな形でやっていく。

——商品開発の基本にあるものは

生活者の視点に立ったものづくりを心がけている。人が使って心地よく感じる“有って無きが如き”商品だ。専門家ではなく、生活者から見て価値がわかるような商品でなければならないと思っている。文化シャッターの文化とは、“豊かな営み”だ。祭りも小道具もおしゃれも機能もすべてが文化。それらの営みに貢献できる企業でありたい。

(日刊建設通信新聞 2005年1月29日)